７．関東入国後の徳川家康と川崎

【天正１８年（１５９０）】
７月５日　小田原落城。（小田原北条氏滅亡へ）
８月１日　徳川家康が江戸に入る。（中原街道を通る）
９月１５日　武蔵国多東郡経久郷（現・府中市）にて検地が行われる（～１９日）。

【天正１９年（１５９１）】
１０月９日　岡上村にて検地が行われる。（～１４日）
⇒代官頭伊奈忠次の配下である袴田七右衛門・三浦長助を検地役人として、村内の有力農民である森彦三が帳簿の執筆を担当する。岡上村（現・麻生区）の検地帳は川崎市域に現存する最も古い検地帳である。

【天正２０年（１５９２）】
２月１０日　宝林山運昌院泉沢寺（現・中原区）宛てに代官神谷重勝が書状を認める。
⇒泉沢寺に対して２０石の寺領が与えられることになっていたが、家康が多忙であり朱印状の発給が遅れていることを伝える。
８月７日　武蔵国橘樹郡堀之内村山王社（現・川崎区の稲毛神社）の検地が実施される。

【慶長２年（１５９７）】
２月３日　小泉次大夫による二ヶ領用水開削事業が開始される。

【慶長３年（１５９８）】
８月１８日　豊臣秀吉が死去する。

【慶長４年（１５９９）】
１月５日　二ヶ領用水の本工事が開始される。

【慶長５年（１６００）】
９月１５日　関ヶ原合戦

【慶長６年（１６０１）】
東海道に伝馬制が敷かれる。
（当初、川崎は宿駅に入らなかった）

【慶長８年（１６０３）】
２月　徳川家康が征夷大将軍となる。

【慶長１３年（１６０８）】
将軍徳川秀忠が小杉御殿を建てる。（将軍の鷹狩りや大名の通行の際の休息所）

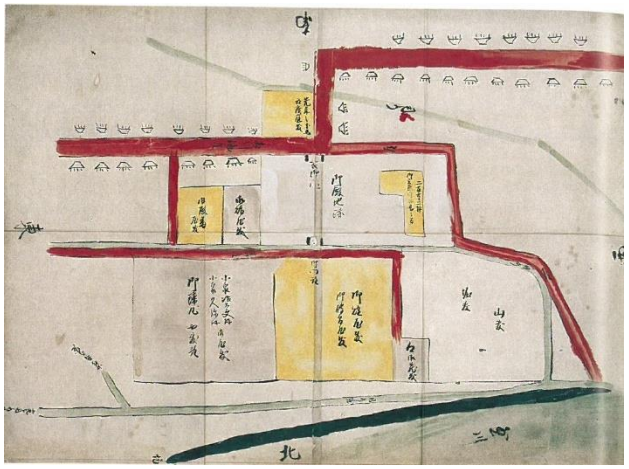
【慶長２０年／元和元年（１６１５）】
大坂夏の陣（豊臣氏滅亡）

【元和２年（１６１６）】
４月１７日　徳川家康が死去する。

お問い合わせは･･･**川崎市公文書館**　まで
〒211-0051　川崎市中原区宮内４－１－１
電　話　044-733-3933　ＦＡＸ．044-733-2400
E-mail　17koubun@city.kawasaki.jp
ホームページ「川崎市公文書館」で検索

川崎市公文書館特設コーナー

「徳川家康の時代における川崎」



小杉御殿絵図　安藤十四秋家所蔵

＊　＊　＊　＊　＊

NHK　大河ドラマ「どうする家康」の放送に合わせて徳川家康の関東入国後における川崎市域についての簡単な解説と共に徳川家康に関する参考文献などを紹介する特設コーナーを設置します。

桃山時代から江戸時代初期の川崎市域史へ注目して頂く機会になればと思います。

令和５年(2023)1月４日
川崎市公文書館

１．戦国の世、終焉へ～豊臣秀吉の統一戦争～

織田信長の死後、その重臣であった羽柴（豊臣）秀吉は織田政権を併呑していき、毛利氏や上杉氏を臣従させ、戦によって諸国を従えていった。畿内・西国に覇権を確立した豊臣秀吉は、日本全国の統一に向けて東国の平定も視野に入れる。奥州の伊達氏、関東の北条氏などへ惣無事令を出し、豊臣氏への臣従を求めた。

秀吉の小田原攻めは、真田氏の城である上野・名胡桃城を北条氏が奪取したことを口実として開始された。天正１８年（１５９０）、秀吉は２０万と言われる軍勢を関東へ派兵する。この時、伊達政宗が秀吉に臣従し、北条氏は日本全国の大名を相手に孤立することになる。

２．小田原北条氏の滅亡

小田原城を本拠とする北条氏は戦国時代を通じて川崎を支配下に置いていた。永禄２年（１５５９）の『小田原衆所領役帳』（北条氏一族・家臣の諸役賦課の基準となる役高を記した史料）によれば「玉縄衆間宮豊前守 66 貫 976 文　江戸川崎」と記されている。

北条氏は天正１８年（１５９０）に豊臣秀吉の大軍によって小田原城を包囲され、降伏する。ここに小田原北条氏は滅亡し、やがて北条氏は狭山の地で存続し、明治維新を迎えることになる。

３．徳川家康の時代

小田原北条氏の滅亡で、関東は徳川氏の時代に入る。豊臣秀吉から加増・転封された徳川家康は江戸に本拠地を定めた。さらに、代官頭伊奈忠次・大久保長安によって地方支配が行われ、川崎領周辺では長谷川長綱や代官神谷弥五助重勝らによって支配が行われる。各地で検地が行われ、川崎市域においても岡上村などで実施されている。ちなみに、岡上村の検地帳は川崎市域に現存する最も古い検地帳である。また、家康の関東入国後に橘樹郡は稲毛領・神奈川領・小机領・川崎領の４領に分けられた。しかし、「領」の呼称については起源が明らかではない（『川崎市史　通史編２　近世』１９頁）。

４．天下人としての徳川家康

豊臣秀吉の死後、徳川家康は豊臣政権のなかの五大老筆頭として台頭する。家康は前田利家らと共に幼い豊臣秀頼を支えるが、やがて豊臣政権で内部対立が勃発する。大名たちは家康と前田利家のそれぞれの屋敷に集い、一時は一触即発の状態にもなった。この非常事態は両者が和解することで解決したが、前田利家の病死によって家康がさらに立場を強固にした。

家康は上洛を渋る上杉景勝を攻めるために自らを総大将として諸大名を参集させた。家康が会津攻めで畿内を離れている間に石田三成が挙兵し、豊臣政権は遂に分裂する。関ヶ原の戦いで勝利を収めた家康は戦後の論功行賞を取り仕切る。やがて朝廷から征夷大将軍に任じられて名実ともに武家の棟梁となった家康は豊臣政権から独立していくのである。

５．二ヶ領用水～小泉次太夫の差配～

小泉次太夫は駿河国富士郡小泉郷にて今川家家臣植松泰清の長男として出生したと伝わる。今川氏が没落すると、徳川家康に登用されて「小泉」に改姓したという。

慶長２年（１５９７）、徳川家康の多摩川沿岸巡視に際して小泉次大夫は引水して新田開発を行なうべきだと進言し、その方針が受け入れられる。そして、稲毛・川崎（二ヶ領用水）と世田谷・六郷（六郷用水）の合わせて四ヶ領の用水建設が行われることになる。慶長４年（１５９９）正月に二ヶ領用水の本工事が開始される。

慶長１６年（１６１１）、二ヶ領用水の普請が完了する。

元和５年（１６１９）、次男に代官職を譲って川崎宿砂子に移転した妙遠寺に隠居し、元和９年（１６２３）に死去する。

６．小杉御殿～将軍・大名の休息所～

小杉御殿は慶長１３年（１６０８）に徳川家康の送迎のために将軍徳川秀忠が建築を命じた仮御殿が発祥である。徳川家康や秀忠が鷹狩りを行なった際や西国大名が中原街道を通行した際には休息所として使用された。家康死去から２４年後の寛永１７年（１６４０）には増改築が行われた。しかし、東海道が整備されると建物は品川・東海寺と上野・弘文院に移築され、家康も使用した小杉御殿は役目を終えた。